

博士論文

ロシア民俗学史再考

坂内 徳明

別冊

注 参考文献



1196049883

序章

- (1) M. Lewin, *Russian Peasants and Soviet Power: A Study of Collectivization*. Tr. from French ed. London, 1968. (荒田洋訳『ロシア農民とソヴェト権力—集団化の研究 1928—1930』、未来社、1972年)
- (2) Lewin, *The Gorbachev Phenomenon. A Historical Interpretation*. Berkeley and Los Angeles, 1988. (荒田洋訳『歴史としてのゴルバチョフ』、平凡社、1988年)
- (3) もっとも、彼の言う「社会システム」論の一部は、次にあげる彼の論文集において具体的に予見もされ、スケッチされていた。Lewin, *The Making of the Soviet System. Essays in the Social History of Interwar Russia*. New York, 1985.
- (4) M. Seton-Watson, *Scenes from Soviet Life: Soviet Life through official Literature*. London, 1986. (奥田央・塩川伸明ほか訳『文学作品にみるソヴェト人の息吹』、朝日新聞社、1988年)
- (5) A. Sinyavsky, *Soviet Civilization: A Cultural History*. New York, 1988. 問題となった彼の『社会主義主義リアリズムとは何か』のほか、代表的評論は邦訳されている

- (『シニャフスキー・エッセイ集』内村剛介・青山太郎訳、勁草書房、1970年)。
- (6) 例えば、雑誌『ソビエト民族学』における論争として、同誌1984年第3号の「最古のスラヴ精神文化の再構成に関する理論的諸問題」をテーマとした質疑応答を参照。
- (7) M. Heller, 原文はロシア語(ロンドン、1985年)。仏訳である *La machine et les rouages*. からの邦訳は、『ホモ・ソビエテイクス [機械と歯車]』(辻由美訳、白水社、1988年)。社会主義国家の儀礼への注目は、青木保『儀礼の象徴性』(岩波書店、1984年)の「儀礼と国家」を参照。
- (8) F・チューチェフ『全詩集』(レニングラード、1957年)。
- (9) 例えば、ロシア・ナショナリズムに関する記述をこのチューチェフの一節から始めている次のモノグラフを参照のこと。S. K. Carter, *Russian Nationalism. Yesterday, Today, Tomorrow*. London, 1990, p. 27.
- (10) N・ゴゴリ『7巻選集』第5巻(モスクワ、1978年)、210-211、236ページ。邦訳は『世界文学全集、32』(集英社、1980年)。
- (11) F・ドストエーフスキイ『30巻全集』第18巻(レニングラード、1978年)41ページ。
- (12) I・ツルゲーネフ『13巻全集』第10巻(モスクワ、1982年)。邦訳は『散文詩』(第一書房、1943年)。
- (13) ただし、こうしたアイデンティティへの過剰な執着から「解放」されている次の言葉を参照。「なんといってもロシア人における主たるものは喪うべき何ものもないということだ。ここからロシア・インテリゲンチヤの無私(ただし本棚は別だ)の精神が出てくる。それから、民衆の直情が出てくる」(シニャフスキイ「思わぬ閃き」、邦訳は、上の注(5)であげた文献の34ページ)。アメリカとともにロシア・ソビ

エトが自己のアイデンティティに対して過剰なまでに敏感であることの指摘は、中井久夫『分裂病と人類』（東大出版会、1982年）の「第3章 西欧精神医学背景史」の「19. ロシアという現象」にある。

(14) 鳥山成人『ロシアとヨーロッパ』（白日書院、1949年）、4ページ。実は、この言葉そのものは『ロシア史』の著者K・シュテーリンによるもの。この鳥山のモノグラフがダニレーフスキイのきわめて不十分でラフなスケッチであるにもかかわらず、「上部構造の歴史を書くことの困難」さを指摘し、素朴な唯物史観の歴史叙述の批判となっていることに注目。

(15) そうした「文体」は、例えば次の文章にもはっきりと見られる。D・リハチョーフ「現代世界におけるロシア文化」『ノーヴィ・ミール』1991年第1号。ただし、ようやくN・ベルジャーエフ『ロシア的イデー』（1946年）のロシア「文化論」が視野にはいつてきたことは注目すべきである。しかし、ベルジャーエフに関する評価も、ロシア文化の「両極性」の指摘にとどまっておらず、ベルジャーエフも含めてロシア文化を二項対立モデルでとらえること自体を問題化すべきである。そのことによって、ロシアは両極性・極端さ、あるいは「文化の中間領域の欠如」（N・ロースキイ『ロシア民族の特徴』フランクフルト／マイン、1957年、第9章）を民族性とするといった、実感的な国民性論・文化論から抜け出て、本格的なロシア文化論が可能になるはずである。これについては、ソビエト文化記号論の問題と係わらせて、終章でふれた。また、現代のロシア人によるロシア文化論をめぐる論争が、その論争の参加者自身が「好きか、嫌いか」の枠組みにとらわれる形で進行していくことに注目。最近の論争については、安井亮平「親露と排露――シャファレーヴィチを中心に」『スラブ研究センター研究報告シリーズ No. 32』（1991年）、同「親露と反露」『交錯する言語』（名著普及会、1992年）。

(16) Michael Cherniavsky, *Tsar and People. Studies in Russian Myths*. New Haven and

London, 1961.

(17) A・ソルジェニーツィン『6巻作品集』第4巻、「第61章 『民衆の中へ』」  
フランクフルト/マイン、1970年。邦訳は『世界文学全集、43』（集英社、1  
972年）。

(18) ドストエーフスキイ『作家の日記』（1876年）の「民衆に対する愛について  
民衆との必要不可欠な接触」にも、ナロード「信仰」ははっきりと描かれている。ソ  
ビエト文学におけるこの問題の「公式的」アプローチは、M・ルカヴィーツィン『ナ  
ロードのもの』（モスクワ、1990年）。ただし、こうしたいわば「新旧ナロード  
ニキを振り切ってしまった」シニャフスキイのような例もある。注（5）の邦訳文献  
の内村剛介の解説を参照。

## 第1章

(1) ブスラーエフの口承文学にたいする関心については、A・バラーンディン『ロ  
シア民俗学における神話学派』（モスクワ、1988年）、また、S・スミルノーフ  
『フョードル・イヴァノヴィチ・ブスラーエフ』（モスクワ、1978年）を参照。

(2) こうした民俗学の時代区分については、M・アザドーフスキイ『ロシア民俗学史』  
（モスクワ、1953年）、25ページ。

(3) 『地理学協会の125年』（レニングラード、1970年）、同じく125周年  
記念のシンポジウム報告集は『ロシア民族学・民俗学・人類学概史』第7冊、レニン  
グラード、1977年。また、『ロシア地理学協会仮規約』（サンクト・ペテルブル  
グ、1845年）には、全65条の規約と創設時の会員メンバーのリストが掲載され  
ている。

(4) ナデージディンらの理論と仕事については、N・ステパーノフ「ロシア地理学協

- 会と民族学。1845-61年」『ソビエト民族学』1946年第4号。
- (5) 『ロシア・フォークロア記念碑』シリーズで近年刊行されているキレーエフスキイ『ロシア民謡集』の構成は、収集者・収集地別によっている。例えば、ヤズニコフ兄弟がシムビルスク、オレンブルグ県で収集したもの(第1巻、1977年)、P・ヤクーシキンの採集したもの(第1巻、1983年、第2巻、1986年)。
- (6) A・フィピン『ロシア民族学史』第1-4巻(ペテルブルグ、1890-92年)
- (7) 同上、第1巻、序文。
- (8) Ja・バルスコーフ『A・N・フィピン著作一覧』(ペテルブルグ、1903年)
- (9) フィピンについては研究がきわめて限られている。主要なものとしては、L・クルプチャーノフ『ロシア文芸学における文化史学派』(モスクワ、1983年)。日本語による紹介として、井口靖「アレクサンドル・フィピンと民族文化」——論文集『ロシア 聖とカオス』(彩流社、1995年)。最近のものとしては、T・ソロヴェイ「A・N・フィピンとロシア史学史における位置」『民族学評論』1994年第4号。
- (10) アザドーフスキイ、前掲書、21ページ。
- (11) A・ソボレーフスキイ「書評。A・フィピン『ロシア民族学史』」『文部省雑誌』1892年2月号。
- (12) P. Burke, *Popular Culture in Early Modern Europe*. London, 1978. (中村賢二郎・谷泰訳『ヨーロッパの民衆文化』人文書院、1988年)
- (13) D・リハチョーフ『ロシア的なるものに関する覚書き(改訂第2版)』(モスクワ、1984年)、9ページ。(長縄光男訳『文化のエコロジー』群像社、1988年)
- (14) V・コーレソフ『中世ロシアのスローボにおける人間の世界』(レニングラード、1986年)
- (15) D・フォンヴィージン「第3身分考」

- (16) B・クラスノバーエフ『18世紀ロシア文化史概説』(モスクワ、1987年)。
- (17) J a・ブルーク『ロシア・ジャンルの源泉にて。18世紀』(モスクワ、1990年)。
- (18) M・クルマチョーヴァ『ロシアの農奴インテリゲンツィヤ。18世紀後半—19世紀初頭』(モスクワ、1983年)。M・シトランゲ『18世紀ロシアの民主的インテリゲンツィヤ』(モスクワ、1965年)。
- (19) 田中克彦「ソ連における民族理論の展開」(1975年)——『言語からみた民族と国家』(岩波書店、1991年)。
- (20) アザドーフスキイによるナロードノスチという言葉の詳細な追及の過程については、彼の公刊・未完のデカブリスト研究を集大成した『デカブリズム史の数ページ』全2巻(イルクーツク、1991年)の第1冊の414—415ページにある注に記されていて、大いに役立った。また、19世紀前半におけるナロードノスチという「抽象名詞」の定着と意味変容については、V・ヴェセリーツキイ『19世紀30年代のロシア文章語における抽象語彙の発達』(モスクワ、1964年)、60—61ページ。
- (21) P・ヴァーゼムスキイ「出版者と古典作家の会話」『著作集』第2巻(モスクワ、1982年)。
- (22) N・モルドーフチェンコ『19世紀第1四半世紀のロシア批評』(モスクワ・ペテルブルグ、1959年)。さらに、M・ギレリソーン『P・A・ヴァーゼムスキイ。生涯と創作』(レニングラード、1969年)。
- (23) A・プーシキン「文学におけるナロードノスチについて」(1825—26年)『全集』第11巻(モスクワ・レニングラード、1949年)。
- (24) 松田道雄「ロシアにおける文化と革命」『講座哲学13、文化』(岩波書店、1968年)。

## 第2章

- (1) 例えば、M・スローニム『ロシア文学史』（池田健太郎訳、新潮社、1976年）。ロシア文学と社会思想に係わりをめぐるラジーシチェフの「伝説」を論述したのは、P・サクーリン『ロシア文学と社会主義』（モスクワ、1922年）の第1章「ロシア社会主義前夜」の箇所が最初であろう。ほぼ同時期に、V・セメーンニコフ『ラジーシチェフ。概観と研究』（モスクワ、1923年）のような本格的モノグラフが登場したことは、時代的限界を別として「学史」の上から重要である。
- (2) 『息子たちによって書かれたA・ラジーシチェフの伝記』（モスクワ、1958年）、63, 65ページ。
- (3) A・プーシキン『全集』第11巻（モスクワ・レニングラード、1949年）。プーシキンとラジーシチェフの関係をめぐっては数多くの研究があるが、とりあえずは、浅岡宣彦「ラジーシチェフとプーシキン」『えうゐ』13号（1984年）。
- (4) V・レーニン「大ロシア人の民族的誇りについて」『全集』第26巻（モスクワ）
- (5) P・ヴァイル、A・ゲニス『国語』（モスクワ、1991年）、23ページ。
- (6) N・ベルジャーエフ『ロシア的イデー』（パリ、1946年）——『ロシア国外の思想家たち』（サンクト・ペテルブルグ、1992年）、59—60ページ。（田口貞夫訳『ロシア思想史』ペリかん社、1974年）
- (7) B・クラスノバーエフ『17世紀後半—19世紀初頭のロシア文化』（モスクワ、1983年）。A・コプィローフ「文化史プロセスの研究における文化の本質と歴史学の役割」論文集『ロシア文化の歴史学・歴史的諸問題』（モスクワ、1983年）、同「80年代初頭のソ連史学における18世紀ロシア文化の基本的側面と研究方向」論文集『国内外におけるロシア文化史の諸問題』（モスクワ、1986年）。
- (8) T. G. Stavrou, P. R. Weisensel, Russian

Travelers to the Christian East from  
the Twelfth to the Twentieth Century.  
Ohio, 1986.

- (9) O・アレクサンドロフスカヤ『18世紀ロシアにおける地理学の成立』（モスクワ、1989年）。
- (10) パラスに関しては、いまだその全体像を正面から扱ったモノグラフがない。とりあえずは、I・オクロクヴェルツホヴァ『パラスのロシア旅行』（サラートフ、1962年）、V・ムラヴィヨーフ『ロシア辺境の道にて』（モスクワ、1977年）。
- (11) ロシア国内移動の法的・制度的問題に関しては、佐藤芳行「帝政ロシアにおける国内旅券制度に関する一考察（1719-1917）」『経済学研究』（東大）第22号（1979年）、新美治一「ツアー・ロシアのパスポート制度」『商学論集』（福島大）51-1（1982年）。
- (12) チェーリシチェフに関しては、K・チストーフ「北ロシアの旅行家P・I・チェーリシチェフ」『境界にて』1952年第9号、V・ピーメノフ、E・エプシュテーイン『カレリアのロシア人研究者（18世紀）』（ペトロザヴォーツク、1958年）第8章。
- (13) 18世紀半ば以降に発展したロシア・ウサージバ文化については、M・アニクスト、V・トゥルチン編の『モスクワの郊外にて・・・』（モスクワ、1979年）といった豪華写真集・資料集のほか、B・ノヴィコフ『オスターフィエヴォ』（モスクワ、1991年）、N・クヴァトコーフスカヤ編『オスターフィエヴォ』（モスクワ、1990年）。
- (14) P・ペカールスキイ「18世紀ロシアのメモアール」『同時代人』1855年第4号。
- (15) S・ミンツ「メモアールの性格を持つ資料から見た1770年代-1830年代ロシア貴族の社会心理」（博士号取得論文要旨、1981年）、A・タルタコーフス

- キイ『18-19世紀前半ロシア・メモアール学』（モスクワ、1991年）。
- (16) ボロトフの伝記は、A・ベールドィシェフ『A・T・ボロトフ—学問と文化の傑出した活動家』（モスクワ、1988年）。また、ボロトフの文学史的 position とメモアールの意義を、簡潔ながらも適確にまとめたものとして、J. I. Rice, *The Memoirs of A. T. Bolotov and Russian Literary History. In A. G. Cross (ed.) Russian Literature in the Age of Catherine the Great.* Oxford, 1976. ちなみにボロトフの『回想記』として、現在まで刊行されているものはM・セメーフスキイ版（1871-73年）、「若き新衛隊」出版社版（1930年）、「アカデミア」出版社版（1931年）、近年はトゥーラ版（1988年）のほか、ドイツ語訳（2巻本、ミュンヘン、1990年）も刊行された。しかし、いずれも省略版である。
- (17) E・イヴァーシナ「1830年代までのロシア文学における「旅行記」ジャンルの特質について」『モスクワ大学紀要 文献学シリーズ』1979年第3号。
- (18) キリーロフについての紹介は、さしあたって、三上正利「キリーロフの生涯とその著『全ロシア国の繁栄状態』」『窓』30（1979年）。
- (19) 『モスクワの郷土史家たち 1』（モスクワ、1991年）、16ページ。
- (20) I・マーリツェヴァ「ロシア・アカデミー辞典におけるローカリズム」—論文集『18世紀の辞書と辞書事業』（レニングラード、1980年）。
- (21) 『N・I・ノヴィコーフの風刺雑誌』（モスクワ・レニングラード、1951年）66ページ。さらに、H. Rogger, *National Consciousness in Eighteenth-Century Russia.* London, 1960. を参照。
- (22) V・シポーフスキイ『18世紀ロシア小説概観』第1巻、第2部、ペテルブルグ、1909-10年、512ページ。

- (23) P・ボガトィリョーフ『モラビア・スロバキヤの民族衣裳の機能』（1937年、スロバキヤ語）―『民衆芸術理論の諸問題』（モスクワ、1971年）（松枝到・中沢新一訳『衣裳のフォークロア』せりか書房、1981年）。
- (24) イヴァーシナ、前掲論文。
- (25) 同上、ならびにT・ロポーリ「<旅>の文学」―論文集『ロシア散文』レニングラード、1926年。マーリツェヴァ「文章語と芸術文学の言葉の源泉としての18世紀旅行記」―『18世紀ロシア作家の言葉』（レニングラード、1981年）。
- (26) 最近の議論は、G・リホートキン「『I・への旅の断片』の著者について」『ロシア文学』1988年第1号。
- (27) A・ラジーシチェフ『全集』全3巻（モスクワ・ペテルブルグ、1938-52年）、第3巻、1952年。「我が領地の記述」については、山本俊朗「18世紀末ロシア農村」『社会経済史学』19巻4、5号（1953年）に紹介がある。
- (28) ラジーシチェフと「雄弁」の伝統については、N・コチェトコーヴァ「デカブリストの雄弁散文と18世紀ロシア文学の伝統」―論文集『デカブリストの文学遺産』（レニングラード、1975年）。同「ラジーシチェフと18世紀の理論における雄弁の問題」―『18世紀』第12巻（レニングラード、1977年）、さらには、同著者による「18世紀末のロシア文学における<告白>」―論文集『ロマンチズムへの道』（レニングラード、1984年）も参照。
- (29) Ju・トィニャーノフ「文学的事実について」『レフ』1924年第2号（水野忠夫訳「文学的事象」―『ロシア・フォルマリズム文学論集』2、せりか書房、1982年）。『旅』におけるジャンルと文体の問題に関するすぐれた研究として、A・スカフトィモフ「A・N・ラジーシチェフ『旅』のスタイルについて」（1929年）―『ロシア文学論集』（サラートフ、1958年）は今なお意義を持つ。
- (30) フォークロリズムというタームについては、とりあえず、『東スラヴ・フォークロア。学問的ならびに民衆的ターミノロジー辞典』（ミンスク、1993年）のフォ

ークロリズムの項（V・グーセフ執筆）を参照。

- (31) M・アザドーフスキイ「『旅』におけるフォークロアのテーマ」（1948年）  
—彼の論文集『文学、フォークロア論集』（モスクワ・レニングラード、1960年）に収録。この問題に関する、より最近の仕事であるマコゴーネンコ「ラジーシチェフ」『ロシア文学とフォークロア（11—18世紀）』（レニングラード、1970年）も基本的論点はこのアザドーフスキイの仕事に負っている。
- (32) T・リヴァーノヴァ『18世紀ロシア音楽文化』第1巻（モスクワ、1952年）  
によれば、『旅』には、婚礼・葬式の泣き歌、春の遊戯とホロヴォード、夜の集い、巡礼歌、土地の伝説・言い伝えなど、ほぼすべてのフォークロア・ジャンルの作品が見出だされるという。
- (33) 「記述者」としてのラジーシチェフについては、白倉克文「イリムスクへの旅」『一橋論叢』76巻3号（1971年）。また、ルボークや人形劇にたいするラジーシチェフの関心も、民族文化の記述の問題にとって重要である。S・エレオーンスキイ『文学と民衆創造』（モスクワ、1956年）、72—75ページ。
- (34) 『旅』のテキストは、1992年に「文学記念碑」シリーズの1巻として刊行されたものによった（V・ザパードフ校訂）。なお、渋谷一郎訳（1958年）、金子幸彦訳（1954年、ただし抄訳）を適宜参照した。
- (35) リボフ＝プラーチ『ロシア民謡集』（ペテルブルグ、1806年）、第1部、16番。なお、この歌はV・プロップ編『ロシア叙情歌謡集』（レニングラード、1961年）では「ホロヴォードの遊戯・踊りによる愛に関する歌」に分類されている。
- (36) (34) にあげたテキストに収められている。
- (37) この「多感」さが、そのままセンチメンタリズムと通ずるかどうか、については検討の余地がある。『旅』のテキストにおける「感じやすさ」については、そのロシア語の問題も含めて、津久井定雄「18、19世紀ロシア文学における「旅」のイメージについての研究」（1990年）で論じられている。この問題は、ロシア語の当

時の使用の点検・語義変化の問題から始まって、この時代の自然観も含めて「感性」全体の再考察なしには解決しえない。なお、センチメンタリズムに関しては、例えばP・オルローフ『ロシア・センチメンタリズム』（モスクワ、1977年、145-162ページ）ではラジーシチェフの『旅』は「デモクラテックなセンチメンタリズム」の作品とされている。

- (38) L・クラコーヴァ、V・ザパードフ『ラジーシチェフ『旅』。コメンタリイ』（レニングラード、1974年）、234ページ。N・ピクサーノフ「ラジーシチェフの<かわいそうなアニュータ>とカラムジンの<かわいそうなリーザ>」、『18世紀』第3巻（モスクワ、1958年）。
- (39) ロートマン「『旅』のコメンタリーより」、『18世紀』第12巻（レニングラード、1977年）、38ページ。
- (40) G・マコゴーネンコ『フォンヴィージンからプーシキンへ』（モスクワ、1969年）。M・チュルコーフ『ロシアのさまざまな歌』（ペテルブルグ、1770-73年、1913年）。
- (41) リヴァーノヴァ、前掲書。
- (42) J. Andrew, Radical sentimentalism or Sentimental Radicalism? A Feminist Approach to Eighteenth-Century Russian Literature. --Discontinuous Discourses in Modern Russian Literature. Ed. by C. Kelly, M. Makin, D. Shepherd. New York, 1989.
- (43) リヴァーノヴァの前掲書。クラコーヴァ、ザパードフの前掲書、『ロシア文学とフォークロア（11-18世紀）』（レニングラード、1970年）の「ラジーシチェフ」の項（執筆者マコゴーネンコ）など。
- (44) クラコーヴァ、ザパードフ、前掲書、41ページ。『旅』第2巻（モスクワ・レニングラード、1935年）、「『旅』研究のための資料」のJa・バルコーフによるコメンタリー、355-356ページ。
- (45) T・ベルンシュタム『伝統的民衆文化の認識と研究における新たな展望』（キエフ、1992年）、35ページ。
- (46) マコゴーネンコ、前掲書、413ページ。
- (47) リヴァーノヴァ、前掲書、127-128ページ。
- (48) クラコーヴァ、ザパードフ、前掲書、42ページ。ラジーシチェフも含めて18世紀における「行動のポエチカ」としての自殺については、ロートマン「18世紀ロシア文化における日常行動のポエチカ」（1977年）。
- (49) アザドーフスキイ、前掲論文。
- (50) クラコーヴァ、ザパードフの前掲書。ラジーシチェフの交友関係については、A・スタールツェフ「ライプチヒのロシア人学生たち」「ラジーシチェフの友」――『ラジーシチェフ。試練の歳月』（モスクワ、1990年）に収録。
- (51) P・チャーリシチェフ『1791年北ロシア旅行記』（ペテルブルグ、1886

年)。

(52) ラジーシチェフ『全集』全3巻(モスクワ・レニングラード、1938-52年)  
第1巻(1938年)に収録。

(53) M・アロンソン、S・レイセル『文学サークルとサロン』(レニングラード、1929年)、N・ブローツキイ編『文学サロンとサークル』(モスクワ・レニングラード、1929年)。ともに、当時のロシア・フォルマリズムの「ロシア文学の成立史」と「文学の社会学」研究の成果と考えてよい。

(54) N・モルドーフチェンコ『ベリーンスキイと彼の時代のロシア文学』(モスクワ・レニングラード、1950年)、第5章を参照。

(55) プーシキン『全集』第11巻(モスクワ・レニングラード、1949年)、256ページ。

(56) 『A・マイエルベルグのアルバム』(ペテルブルグ、1903年)。

(57) プーシキンのラジーシチェフ評価をいかに考えるか、については、さしあたっては、津久井定夫の前掲の報告書、90-114ページを参照。

(58) 18世紀末から1830年代の「プーシキンの時代」にかけて、ロシア「社会」、あるいは「制度」としてのロシア「文学」が成立していった、という構想は、ロートマンのロシア文化史の基本的テーゼであり、具体的には例えば、W. M. Todd III, *Fiction and Society in the Age of Pushkin*. Harvard, 1986. で展開されている。

### 第3章

- (1) S・コリンズ『ロシアの現状』（ロシア語訳、1846年）。また、N・ノヴィコフ編『初期に記述、刊行されたロシア昔話（16-18世紀）』（レニングラード、1971年）の注を参照。
- (2) R. Jakobson, *On Russian Fairy Tales* (1946). -- *Selected Writings*, 4, Hague·Paris, 1966. (中村喜和訳「ロシアの昔話について」『アフナーシェフ ロシア民話集(上)』岩波文庫、1987年、に収録)
- (3) M・アザドーフスキイ「レールモントフのフォークロリズム」--『文学・フォークロア論集』（モスクワ・レニングラード、1960年）。
- (4) N・タールホヴァ編『プーシキン時代の文学的昔話』（モスクワ、1988年）を参照して作製。もっとも、作家が書いた昔話としての「文学的昔話」というカテゴリーは以前から存在していた。近年のこの分野でのアンソロジーとしては、N・リスチコヴァ編『ロシアの文学的昔話』（モスクワ、1989年）。しかし、タールホヴァの編になるアンソロジーは、本稿で問題とする1830年代に焦点をあてている点で注目すべきである。彼女の長文の序文はそのことをはっきりと示している。さらに19世紀前半の文学と昔話との関連を論じたものとしては、古くはN・トルビーツィンのモノグラフ『19世紀30年代までの文学的・社会的慣習における民衆詩について』（ペテルブルグ、1912年）、I・ルパーノヴァ『19世紀前半の作家の創作におけるロシア昔話』（ペトロザヴォツク、1959年）を参照。
- (5) 『18世紀モスクワ事務文書集』（モスクワ、1981年）、L・ヴラジーミロヴァ「17世紀事務文書におけるスカースカ」--『ロシア語』1982年第4号。
- (6) 「キリル・トゥーロフスキイの『説教』」『中世ロシア文学作品集成。12世紀』（モスクワ、1980年）。

- (7) 『歴史法令集』第4巻、125ページ。興味深いのは、先にふれた12世紀のキリル・トゥーロフスキイの『説教』にも、バースニャという語とともに列挙される禁止さるべき罰あたりな行為として、夢占い、各種の予兆、鳥の聞きなし、謎かけなどここにあげたのとまったく同様のものがあがっていることである。さらに、バースニャという言葉における「呪術性」について想起。この言葉自体にも、呪文の意味がある。『11-17世紀ロシア語辞典』を参照。
- (8) 『18-19世紀初頭の詩的スカースカ(ノヴェラ)』(詩人文庫、レニングラード、1969年)。N・ノヴィコフ編、前掲書。E・ポメラーンツェヴァ『ロシア昔話の運命』(モスクワ、1965年)。
- (9) ノヴィコフが発行したこの児童雑誌については、藤沼貴「『心と理性のための子どもの読み物』1-3」『ソ連出版文化通信』1985年、4-6号。
- (10) 『18-19世紀初頭の詩的スカースカ(ノヴェラ)』。
- (11) N・ノヴィコフ編、前掲書。
- (12) B・ウスペンスキイ『18-19世紀初頭のロシア文章語史—カラムジーンの言語プログラムとその歴史的根源』(モスクワ、1985年)。
- (13) トルビーツィン、前掲書。V・ヴィノグラードフ『17-19世紀ロシア文章語史』(モスクワ、1982年)。
- (14) V・コズローフ『ロシア古代のコロンブスたち』(モスクワ、1981年)。
- (15) この論争については、いわゆる「言語学史」ではごく簡単にふれられるだけで、これまでほとんど研究がされてこなかった。シシコフを保守派、カラムジーンをブーシキンにつながる進歩派とする枠組みを前提としながらも、カラムジーンの、特に後半生の「国家奉仕」的側面を根拠とした把握が主流だった。しかし、そうした「政治主義的」理解で、この論争を十分に考察できないことは当然である。むしろ、例外的な研究として、モルドチェンコ『ロシア批評史』、さらにロートマン、ウスペンスキイによる「ロシア文化の事実としての19世紀初頭の言語論争」(197

5年)などがあげられる。特に、後者はこの論争の「言語学的」のみならず「社会思想的」考察をおこなっていて、ひとつの新しい方向を打ち出している。

(16) シシコーフの文中にある「粗野な、荒っぽい」grubiyiをはじめとして「重々しい」「快い」「穏やか」「やさしい」といった言葉をてがかりとして19世紀初頭の文化的コンテクストを描き出そうとした試みが上であげたロートマン、ウスペンスキイの仕事である。

(17) A・スロニームスキイ『プーシキンの文章術』(モスクワ、1959年)。

(18) B・エイヘンバーウム「レールモントフ論」(1924年)

(19) プーシキン「散文について」(1825年)

(20) アザドーフスキイ『ロシア民俗学史』第1巻(モスクワ、1958年)。同「プーシキンとフォークロア」『文学とフォークロア』(レニングラード、1938年)。後者にもとづいて書かれたと思われる中田甫「プーシキンに与えたフォークロールの影響について」(ハレピン学院論叢2、康德2年)は、この問題の全体を的確に知らせてくれる。ただし、「国民性」「世界文学」の把握は不十分である。

(21) プーシキン『全集』

(22) 同上。プーシキンの言語・文体観については、V・ヴィノグラードフ『プーシキンの言葉』(モスクワ・レニングラード、1935年)。同『プーシキンの文体』(モスクワ、1941年)。

(23) G・マコゴーネンコ『1830年代のプーシキンの創作』(レニングラード、1982年)。

(24) V・シクローフスキイはプーシキンの散文を論じる際に、戯曲家A・オストローフスキイの「民衆のために書くには、民衆がしゃべっている言葉によってではなく、民衆がしゃべりたいと望んでいる言葉でもって書かなくてはいけない」という文章を引いて、そうした言葉をはじめで使用したのがプーシキンであるとしているが、この指摘は説得的である。また、シクローフスキイは、プーシキンの『大尉の娘』に描か

れた登場人物たちの発音が「庶民的ではなく、むしろアルカイック」であることを指摘している（シクロフスキイ『散文物語』（モスクワ、1981年）に収録された「プーシキン論」の「夢と願望の言語」）。

(25) プーシキン『全集』第11巻（1949年）。

(26) V・ネポムニャーシチイ「30年代におけるプーシキンの創作進化によせて」『文学の諸問題』（1973年第11号）。この「金の鶏の話」の「不可解さ」については、小野理子「あなおそろしのシャマハの美女」『プーシキン再読』（創元社、1987年）。

(27) ダーリの伝記としては、M・ベッサラフ『ヴラジーミル・ダーリ』（モスクワ、1972年）、V・ボルドミーンスキイ『ダーリ』（モスクワ、1971年）、同『生涯と言葉・ダーリ』（モスクワ、1985年）。日本語として、栗原成郎「ウラジーミル・ダーリ点描」『窓』9（1974年）。プーシキンとダーリの交友については、以上の文献のほか、詳細については、以下のものを参照のこと。L・マーイコフ『プーシキン。書誌的資料』（ペテルブルグ、1899年）、『同時代人の回想におけるプーシキン』第2巻（モスクワ、1974年）、P・バルテーネフ『プーシキンに関する物語』（レニングラード、1925年）、また、『プーシキン。晩年の書簡、1834-37年』（モスクワ、1969年）のダーリの項を見よ。

(28) P・メーリニコフ「ヴラジーミル・イヴァノヴィチ・ダーリ」『ダーリ全集』第1巻（ペテルブルグ・モスクワ、1897年）

(29) (27) にあげた文献の『同時代人の回想におけるプーシキン』に収められたダーリの回想。

(30) ダーリ「現代ロシア語についての一つ半の言葉」『ダーリ全集』第10巻。

(31) ダーリの言語観については、M・カンカーヴァ『語彙研究者としてのダーリ』（トビリシ、1958年）。ヴィノグラードフ『17-19世紀ロシア文章語史概説』（モスクワ、1982年）。

- (32) ダーリの民俗学的・文学的仕事の全体については、Z・ヴラーソヴァ「ダーリ」『ロシア文学とフォークロア。19世紀前半』（レニングラード、1976年）。ダーリの「ロマンチズム」の批判の一例は、チェルヌィシェーフスキイによっておこなわれている。これについては、上記のアザドーフスキイ『ロシア民俗学史』を参照のこと。
- (33) アファナーシエフの伝記としては、V・ポルドミーンスキイ『きみにお話しをしてあげようか』（モスクワ、1970年）が唯一だが、これは「語り手A・N・アファナーシエフの生涯と仕事の物語」のサブタイトルが示すように、ひとつの「創作」物語である。ただし、中村喜和「アファナーシエフ略伝」『窓』21号（1977年）は、コンパクトながらまとまっている。近年、伝記的事実が新たに解明されつつあり、本格的な「アファナーシエフ伝」が書かれることが予想される。
- (34) この「著作目録」は『ルースキイ・アルヒーフ』1871年、1948-1955ページ、に掲載されている。
- (35) Ju・ソコロフ「A・N・アファナーシエフの生涯と学問活動」『アファナーシエフ・ロシア昔話集』全3巻（レニングラード、1936-40年）、第1巻、41-42ページ。
- (36) 同上。
- (37) アザドーフスキイ『ロシア民俗学史』。
- (38) 『ロシア・ウースチエのフォークロア』（レニングラード、1986年）。このほか、近年、シベリアにおける昔話をはじめとした各種フォークロアの採集活動が活発に展開していることを想起。
- (39) 本論文の補論256-261ページ、を参照。
- (40) Ju・ロートマン「特殊な記号学的システムとしての日常行動」（1977年）『タルトゥ大学紀要』第411冊。
- (41) 『サラートフで集められたアネクドート200』（サラートフ、1992年）。

(42) E・クールガノフ編『18世紀末－19世紀初頭のロシアの文学的アネクドート』  
(モスクワ、1990年)。

(43) シニャフスキイ「思わぬ閃き」(パリ、1965年)。序章の注(5)(13)  
を参照。

#### 第4章

(1) 小平武「ゴゴリの雑色・雑多・蝟集性」『えうみ』13(1990年)。

(2) N・ゴゴリ『7巻作品集』第3巻(モスクワ、1977年)。(横田瑞穂訳  
「肖像画」『ゴゴリ全集』3、河出書房、1976年)。

(3) すぐれた版画研究者で歴史博物館研究員だった故A・サコーヴィチは、ルポーク  
を単純に「民衆的(ナロードヌイ)」という限定語でもって説明・理解することに疑  
問を投げかけている(「17－18世紀のロシア木版画」『装飾芸術』、1971－  
10、33ページ)。この点は、さらに近年のT・ヴォローニナでも明らかである  
(「19世紀20－60年代のロシア・ルポーク」(モスクワ、1990年)、3－  
4ページ)。この疑問は、要するに、この種の版画作品の流布(民間に広まっていた  
ということ)と目的(「上からの」「ナロードのための」ルポークでないもの)の点  
で、これまでのあいまいな「民衆的(ナロードヌイ)」ルポークをより緻密にとらえ  
るべきという視点へと通ずるものである。筆者はそれに基本的に賛成であるが、問題  
となるのはその先であり、本章はその点をルポークの社会的生態・流布と研究史との  
双方からなる学史という側面から考えようとするものである。

(4) ルポークの全容の簡単な紹介は、ロシア・ソビエトの各種百科事典での記述のさ  
れ方もふくめて金光不二夫「ルポーク覚え書(1)」『なろうど』10(1984年)  
でおこなわれている。

- (5) O・バルジナ『ロシア民衆画』（モスクワ、1972年）、160-202ページ。
- (6) I・ザベーリン『16-17世紀ロシア皇帝の家庭風習』（モスクワ、1915年）、230ページ。
- (7) 『ルボーク。17-19世紀のロシア民衆画』（レニングラード、1984年）、7ページ。
- (8) サコーヴィチ『ヴァシリイ・コーレニの民衆版画本』（モスクワ、1983年）。
- (9) A・パーンチェンコ『ピョートル改革前夜のロシア文化』（レニングラード、1984年）。
- (10) M・アレクセーエヴァ「17世紀末-18世紀モスクワにおける版画取引とその管理」——論文集『17-18世紀ロシアの民衆版画とフォークロア』（モスクワ、1976年）に収録。
- (11) アレクセーエヴァ『ピョートル期の版画』（レニングラード、1990年）。
- (12) D・ロヴィーンスキイ『ロシア民衆絵画』全5巻（モスクワ、1881年）、第5巻、161ページ。
- (13) 坂内徳明「版画への視線」——『ロシア文化の基層』（日本エディタースクール出版部、1991年）に収録。
- (14) Ju・ロートマン「ロシアの民衆版画の芸術的性格」——論文集『17-19世紀ロシアの民衆版画とフォークロア』（モスクワ、1976年）に収録。（桑野隆訳、同編『ロシア・アヴァンギャルドを読む』1984年）
- (15) E・イートキナ『ロシアの手書きルボーク』（モスクワ、1985年）、6-8ページ。
- (16) この分野の古典的研究としては、T・グリツ他『文学と商業』（モスクワ、1929年）、V・シクローフスキイ『マトヴェイ・コマローフ』（モスクワ、1929年）であり、それ以降、長らく研究がなかった。ようやく、L・プシカリョーフのモ

ノグラフィ『エルスラン・ラザレーヴィチ物語』（モスクワ、1980年）のほか、コマロフに関してはL・カメーディナの博士候補資格論文「マトヴェイ・コマロフと18世紀大衆文学」（モスクワ、1984年）のような成果が生まれている。

(17) ここ数年にチュルコフ、バルコフなどの作品テキストが相次いで出版されている。18世紀の出版文化の全体像はG・マーカー『1700-1800年ロシアにおける出版、印刷と知的生活の起源』（プリンストン、1985年）に詳しい。

(18) Ju・トィニャーノフ「文学的事実について」『レフ』1924年第2号。（水野忠夫訳「文学的事象」——『ロシア・フォルマリズム文学論集』2、せりか書房、1982年）

(19) グリツ他、前掲書、11ページ。

(20) この問題をめぐる資料と論点の整理は、G・コメローヴァ『18世紀末-19世紀初頭ロシア民衆生活の場面』（レニングラード、1961年）に詳しい。また、特にこの問題を考察したJa・ブルークの『ロシア・ジャンルの源泉にて。18世紀』（モスクワ、1990年）は、18世紀初頭から後半、末にかけてのロシア「風俗画」のジャンルの成立を実に丹念に、しかも鮮やかな問題意識とともに永年を費やしてまとめた会心の仕事である。

(21) J. Atkinson, A Picturesque Representation of the Manners, Customs and Amusements of the Russians. Vol. 1-3. London, 1812. さらに、イートキナ「1750年代のA・ダルシュテインのロシア版画シリーズ」『文化遺産。1981年』（レニングラード、1983年）、ならびに、上記のコメローヴァのモノグラフを参照のこと。

(22) E・ガヴリーロヴァ「グラフィクス」——『18世紀ロシア文化概観』第4部（モスクワ、1990年）。

(23) A・コルニーロヴァ『アルバム絵の世界。18世紀末-19世紀前半ロシアのア

- ルバム版画』(レニングラード、1990年)、21-65ページ。
- (24) A・コロスチン『19世紀ロシア・リトグラフ』(モスクワ、1953年)、12ページ。
- (25) 『幻燈、あるいはサンクト・ペテルブルグのありふれた売り子、職人、その他庶民の商売人をそのいでたちのままに、人物と身分に応じたかけあいも交えて忠実な筆で描いた情景』(ペテルブルグ、1817-18年、ファクシミリ版、モスクワ、1988年)。
- (26) こうした作品のアンソロジーとして『モスクワ生活ルポ』(モスクワ、1962年)、『過ぎ去ったモスクワ』(モスクワ、1963年)を参照。
- (27) コロスチン、前掲書、17-44ページ。
- (28) A・プーシキン『全集』第8巻(モスクワ・ペテルブルグ、1948年。(神西清訳『大尉の娘』—『プーシキン全集』4、河出書房、1972年)。
- (29) プーシキン『全集』第8巻(1948年)、404ページ。
- (30) I・スネギリョーフ「ロシアの民衆画廊、あるいはルボーク」—『祖国雑記』第12部、30号、1822年。
- (31) スネギリョーフの生涯と仕事の全体に関しては、現時点まであまり明らかでないが、さしあたっては、M・アザドーフスキイ『ロシア民俗学史』第1巻(モスクワ、1958年)、S・トーカレフ『ロシア民族学史』(モスクワ、1966年)を参照。
- (32) スネギリョーフ『モスクワ世界におけるロシア人のルボーク画』(モスクワ、1861年)。
- (33) O・フローモフ『19世紀ロシア・ルボーク画の史学史』(モスクワ、1991年)、9ページ。
- (34) 例えば、上であげた1822年の論文で彼は、冬の夜に農民たちが「最後の審判」や「聖者たちの試練」といった宗教的ルボークの解説の説明に耳を傾ける「牧歌的」光景を紹介して、「善良な住人たちは聞き入り、この説明で生活上の悲しみを耐え、

忘れることを学び、永遠の至福を強く期待し、永遠の苦しみを怖がる」と記す。このように始まった民俗学的記述の最初のページが、すぐに、「官製ナロードノスチ」へと「吸収」されていく過程が考察されなくてはならないだろう。

(35) (33) であげた文献。

(36) V・ベリーンスキイ「1841年のロシア文学」——『全集』第5巻（モスクワ、1954年）。

(37) アザドーフスキイ、前掲書。

(38) 『ロシアの本。1861—1881年』第2巻（モスクワ、1990年）、23ページ。

(39) Yu・ゴルシコーフ「ロシアのルポーク、マニユファクチュアから工場へ」——『本』第47巻（モスクワ、1983年）、105—108ページ。

(40) I・ペロウーソフ「過ぎ去ったモスクワ」——アンソロジー『過ぎ去ったモスクワ』（モスクワ、1963年）。

(41) I・スイチン『本のための人生。過ぎ去った数ページ』（モスクワ、1985年）（松下裕訳『本のための生涯』図書出版社、1991年）。なお、スイチンについては、E・ディーネルシュテイン『I・D・スイチン』（モスクワ、1983年）のほか、彼の出版活動50周年記念の論集『本のための半世紀』（モスクワ、1916年）を参照。

(42) T・ヴォローニナ『19世紀20—60年代のロシア・ルポーク』（モスクワ、1993年）、227—229ページ。

(43) M・レームケ『19世紀ロシアの検閲とジャーナリズム概史』（ペテルブルグ、1904年）、259—261ページ。ロヴィーンスキイ『ロシア民衆絵画』全5巻、（1881年）、第4巻、269ページ。

(44) V・チスチャコーフ「行商人の籠から。古い歌集」『愛書家文集』第14巻（モスクワ、1983年）。

- (45) V・バザーノフ『フォークロアから民衆本へ』(レニングラード、1973年)、  
N・コパニョーヴァ「19世紀における民衆のための歌集」——『ロシアの図書館と  
その読者』(レニングラード、1983年)。
- (46) C. A. Frierson, *Peasant Icons: Representations of Rural People in Late 19th Century Russia*. Princeton, 1993.
- (47) 1850年代末—1860年代の「民衆本」をめぐるブスラーエフ、ピーサレフ、  
アイピンらの「発言」と「議論」については、(45)のバザーノフの文献の第1章  
を参照。
- (48) I・ゴールィシエフ『作品集』第1巻(ペテルブルグ、1899年)。このゴー  
ルィシエフという人物については、N・ルダコーヴァ「ムスチョーラにおけるI・A  
・ゴールィシエフのリトグラフ工房」——論文集『17—18世紀ロシアの民衆版画  
とフォークロア』(モスクワ、1976年)。
- (49) N・ネクラソフ『3巻作品集』(モスクワ、1959年)。(谷耕平訳『ロシ  
アは誰に住みよいか』岩波文庫、1961年)。
- (50) この出版社の活動は1925年、ないし1935年まで続いた。については、と  
りあえず、青木明子「「ポスレードニク」社の事業とトルストイ、上下」『なるうど』  
16, 17(1988年)。
- (51) A・コトリアレフスキ「民衆のルボーク画による昔のロシアへの見解」18  
56年——『著作集』第1巻(ペテルブルグ、1889年)。F・ブスラーエフ「ロ  
シアの民衆本とルボーク出版」『祖国雑記』第88巻、1861年。ゴールィシエフ  
の論文は前掲書に収録。
- (52) フローモフのアルヒーフ調査によれば、このアトラス版には4種類が存在すると  
という(フローモフ、前掲書、18ページ)。
- (53) ロヴィーンスキ、前掲書。ただし、このルボークの場面がピョートルの葬式を  
描いたものではないか、という見解自体はすでに1822年時点でのスネギリョーフ  
にある。ただし、スネギリョーフは1861年の時点では、猫ずきだったイヴァン雷  
帝とのつながりについても言及している。また、ルボークを民衆的ユーモアの作品と  
してとらえる傾向は、ロヴィーンスキの同時代には特徴的であった(例えば、I・  
ハルラーモフ「ロシア民衆のユーモア」『ジェーロ』1881年第12号)。V・ス  
ターソフは、このルボークについてピョートルにたいする分離派教徒たちのカリカ  
チュア表現であるとする民衆の声が1860年前後に存在したことを書き記している。  
そのことは、作品テーマ解説の問題とは別に、当時の社会におけるひとつの反応とし  
て重要と思われる(スターソフ「D・A・ロヴィーンスキ著作批評」『3巻著作集』  
ペテルブルグ、1894年)。
- (54) V・アダリョコーフ「ドミトリイ・アレクサンドロヴィチ・ロヴィーンスキ」  
『古き歲月』1916年、4—6月号。G・ヴズドルノフ『ロシア中世絵画の発見と  
研究の歴史。19世紀』(モスクワ、1986年)。
- (55) 革命までの時期の「大衆文学」の全体については、A・ブリューム「19世紀後  
半のロシア・ルボーク本」——『本』第42巻(1981年)。J. Brooks,  
*When Russia learned to read. Literacy and popular literature 1861—1917*. Prin-  
ceton, 1985.
- (56) この時期のフォークアートをめぐる諸問題については、さしあたって、新田喜代  
見『19世紀末—20世紀初頭ロシア絵画における民衆芸術の伝統の使用の諸問題』  
(ロシア語、博士候補資格修得論文、モスクワ、1984年)。
- (57) ヴァシーリイ・カンディンスキイは、1911年のある友人への手紙で次のよう  
に書いている。「私の永年におたる夢は、出来るだけ古くてプリミティヴな(大蛇や  
悪魔、司祭などが描かれている)『最後の審判』のルボークを手に入れることです。  
もしもあなたが、アブラクシン横町か市場でそうしたものに出くわしたならば、せひ  
とも私のために購入し、送って下さい」(V・コフトゥーン「カンディンスキイのN  
・I・クリビーンへの手紙」『文化遺産』1980)レニングラード、1981年、  
407ページ。彼のルボークとの関わりについては、さしあたって、伊東一郎「カン  
ディンスキイの民俗学調査について」『民族芸術』2(1986年)。注目したいの  
は、同時代の西欧の画家たちがこうした「伝統的」作品を見るためには空間的・時間  
的に莫大な移動を必要としていたのにたいし、ロシアではつい目と鼻の先にある市場  
や街頭をうろつけばよい、という点である。さらに、今世紀初頭の看板やポスターを

- はじめとした「都市フォークロア」については、N・バブーリナ『ロシアのプラカード。19世紀後半—20世紀初頭』（レニングラード、1988年）。G・オストロフスキイ「ロシアのヴィジュアル・フォークロアの本質について」『ソビエト民族学』1974年第1号。同「ロシアの看板」『芸術展望、78』（モスクワ、1979年）。同「芸術史の問題としての18—20世紀初頭ロシア都市の民衆芸術文化」——論文集『近世・近代芸術文化におけるプリミティヴとその位置』（モスクワ、1983年）。G・ポスペーロフ『ダイヤのジャック。1910年代モスクワ絵画におけるプリミティヴと都市フォークロア』（モスクワ、1990年）。
- (58) N・トプーリヤ「民衆〈新聞〉のページ」『文学修業』1990年第4号。
- (59) S・クレピコーフ「ロシア民衆絵画におけるレールモントフとその作品」『文学遺産』第45—46巻（1948年）。同「ロシア民衆絵画におけるネクラーフとその作品」『文学遺産』第53—54巻（1949年）。同『ロシア民衆絵画におけるI・A・クリューフとその作品』（モスクワ、1950年）。同編『ルボーク。第1部、民謡』（モスクワ、1939年）。F・ロギーンスカヤ『ソビエト・ルボーク』（モスクワ、1929年）。これまでのルボーク研究にとってほぼ唯一とも言えるP・ベルコーフ編のビブリオグラフィ「ロシア民衆（ルボーク）絵画に関する文献書誌のための資料」『ロシア・フォークロア』第2巻（1958年）を参照のこと。ただし、先にあげたシクローフスキイ『マトヴェイ・コマローフ』や、ベルコーフの論文「18世紀大衆文学研究の問題によせて」『ソ連邦科学アカデミー紀要』1936年、第3号、のような、当時の階級分析主流の研究とは異なる方向をとるものもあった。
- (60) 論文集『近世・近代芸術文化におけるプリミティヴとその位置』（モスクワ、1983年）。
- (61) 『17—19世紀ロシアの民衆版画とフォークロア』（モスクワ、1976年）。
- (62) ロートマン「ロシアの民衆版画の芸術的性格」、(61)にあげた文献に収録。（桑野隆訳、同編『ロシア・アヴァンギャルドを読む』1984年）。

## 終章

- (1) 例えば、A・ブガーノフ『19世紀農民の記憶におけるロシア史と民衆意識』（モスクワ、1992年）。
- (2) M・グロムィコ『ロシア農村の世界』（モスクワ、1991年）。
- (3) この論文は、論文集『正教とロシア民衆文化』（『ロシア民族学者』文庫、第1冊、モスクワ、1993年）に所収。これは、彼女とS・クズネツォーフ、ブガーノフによる問題提起「ロシア民衆文化における正教：研究の方向」（『民族学評論』1993年第6号）を受けた成果である。
- (4) T・ベルンシュタム『伝統的民衆文化の認識と研究における新たな展望』（キエフ、1992年）の第3講義を参照。
- (5) The Semiotics of Russian Cultural History (Cornell UP., 1985)の序文。
- (6) Ju. ロートマン『文化と爆発』（モスクワ、1992年）。
- (7) 「農村派」については、安井亮平「土と記憶と和」『ヨーロッパ文学研究・特集号』（1988年）、同「＜農村派＞の文学者とペレストロイカ」『ソ連農業の歴史と現在』（木鐸社、1989年）。レフ・グミリョーフに関しては、井上絃一「リエフ・グミリョーフのエトノス論について」『スラブ研究センター研究報告シリーズNo. 52』（1994年）、安井「民族はどこから来てどこへ行くかーグミリョーフの「激情の理論」」月刊百科1994年8月号、同「レフ・グミリョーフをめぐってあれこれ」『ロシア史研究』53、同号には、実証派歴史家の栗生沢猛夫のグミリョーフ批判も掲載されている。「ユーラシア主義」については、栗生沢「『東方への脱出』ーユーラシア主義の成立」『日本とロシア』（1987年）、同「ユーラシア主義者のロシア民族・文化論」『ロシアと日本』（1990年）。さらに、米重文樹「司馬遼太郎氏における『ロシアの特異性』ーユーラシア主義との接点」『言語文化研

究（広島大学総合科学部紀要）5』（1987年）。

（8）前世紀末から今世紀前半の「忘れられた思想家」のコムイズムについての概略は、論文集『ロシア・コスミズムにおける学問理解』（モスクワ、1992年）によって知ることができる。

（9）上記の（4）を参照。以下の叙述で「人間学」と訳したのは *anthropology* のロシア語である。この語が伝統的に「形質人類学」の意味しか持たなかったこと、それを補うのがロシア文化記号論であったことの指摘については、序章でふれた。そして、ベルンシュタームも、1920-40年代のM・バフチーン、V・プロープ、O・フレイデンベルグ、L・ヴィゴーツキイらの仕事を「人間学派」としてまとめ、現代では、例えば歴史家のA・グレーヴィチの「歴史の中の人間」と題された論文（『オディセイ』No. 1, 1989年）の中に「文化に対する『人間学的』視点」のあることを指摘する。こうした *anthropology* への過剰なまでの期待と思い込みについての是非はここではふれない。むしろ、その事実の指摘にとどめたい。

（10）例えば、『ソビエト民族学』誌に掲載された次の論文を参照。R・ジャルイルガシーノヴァ「ソビエト民族学における民族的自意識の理論」（1987年第4号）、V・フィリーポフ「ロシアの民族的自意識の研究史から」（1991年第1号）。さらに、論文集『ソ連邦と外国諸民族の民族学研究のヒストリオグラフィ』（モスクワ、1989年）に所収のL・ラシューク「ロシア民族学の形成の諸問題」。

（11）B. Russell, *The Practice and Theory of Bolshevism*. London, 1920.（河合秀和訳『ロシア共産主義』みすず書房、1990年）。さらに、書簡の中の次の言葉を参照。「私はロシアが好きになれない自分を叱った。ロシアは力強い創業の特徴をことごとく具えている。この国は、醜く、野蛮ではあるが、建設的エネルギーと自分がつくりつつあるものに対する信念にあふれている」（アラン・ウッド『ラッセルー情熱の懐疑家』みすず書房、1968年）

## 参考文献

- Адарюков В. Я .  
Дмитрий Александрович Ровинский. Старые годы . 1916, апрель—июнь.
- Азадовский М. К .  
Пушкин и фольклор. — Литература и фольклор . Л . , 1938.
- Его же  
Фольклоризм Лермонтова (1941) — Статьи о литературе и фольклоре .  
М. — Л . , 1960.
- Его же  
История русской фольклористики . Т . 1, М . , 1958.
- Его же  
Страницы истории декабризма. Кн. 1—2. Иркутск, 1991.
- Александровская О. А .  
Становление географической науки в России в 18 веке. М . , 1989.
- Алексеева М. А .  
Торговля гравюрами в Москве и контроль за ней в конце 17—18 вв .  
— Народная гравюра и фольклор в России 17—18 вв. М . , 1976.
- Ее же  
Гравюра на дереве < мыши кота на погост волокут >— памятник русского  
народного творчества конца 17— начала 18 в . 18 век, 14. Л . , 1983.
- Ее же  
Гравюра петровского времени. Л . , 1990.
- Аникст М. А ., Турчин В. С . /сост.  
... В окрестностях Москвы. М . , 1979.
- Аронсон М ., Рейсер С .  
Литературные кружки и салоны Л . , 1929.
- Бабурина Н. И .  
Русский плакат . Вторая половина 19—начало 20 в . Л . , 1988.
- Базанов В. Г .  
От фольклора к народной книге. Л . , 1973.
- Баландин А. И .  
Мифологическая школа в русской фольклористике. М . , 1988.
- Балдина О. Д .  
Русские народные картинки М . , 1973.
- Ее же  
К вопросу о взаимоотношениях народных картинок ( гравюра на дереве ). —  
Русское искусство 18 века. Материалы и исследования . М . , 1973.
- Барсков Я. Л .  
Список трудов акад . А . Н . Пыпина. 1853—1903. СПб . , 1903.
- Бартенев П. И .  
Рассказы о Пушкине . Л . , 1925.
- Белинский В. Г .  
Русская литература в 1841 году . — ПСС. Т . 5. М . , 1954.
- Белоусов И. А .  
Ушедшая Москва . — Ушедшая Москва . М . , 1963.
- Бердышев А. П .  
А . Т . Болотов — выдающийся деятель науки и культуры . М . , 1988.
- Бердяев Н. А .  
Русская идея (1946) — Мыслители русского зарубежья. СПб . , 1992.
- Берков П. Н .  
К вопросу об изучении массовой литературы 18 века. Известия АН СССР ,  
1936 — 3.
- Его же  
Материалы для библиографии литературы о русских народных ( лубочных )  
картинках. Русский фольклор . Т . 2. 1958.
- Бернштам Т. А .  
Новые перспективы в познании и изучении традиционной народной культуры  
Ки в . , 1992.

- Бессараб М. Я.  
Владимир Даль. М., 1972.
- Биография А. Н. Радищева, написанная его сыновьями. М. — Л., 1959.
- Блюм А. В.  
Русская лубочная книга второй половины 19 в. Книга. Т. 42. М., 1981.
- Богатырев П. Г.  
Функции национального костюма в моравской Словакии. — Вопросы теории народного искусства. М., 1971.
- Бродский Н.  
Литературные салоны и кружки. М. — Л., 1929.
- Брук Я. В.  
У истоков русского жанра. 18 век. М., 1990.
- Буганов А. В.  
Русская история в памяти крестьян XIX века и национальное самосознание. М., 1992.
- Буслаев Ф. И.  
О русских народных книгах и лубочных изданиях. Отечественные записки. Т. 88. 1861.
- Вайль П., Генис А.  
Родная речь. М., 1991.
- Веселитский В. В.  
Отвлеченная лексика в русском литературном языке 18 — начала 19 в. М., 1962.
- Его же  
Развитие отвлеченной лексики в русском литературном языке первой трети 19 века. М., 1964.
- Вздорнов Г. И.  
История открытия и изучения русской средневековой живописи. 19 век. М., 1986.
- Виноградов В. В.  
Очерки по истории русского литературного языка 17 — 18 веков. (1934, 1938) М., 1982.
- Его же  
Язык Пушкина. М. — Л., 1935.
- Его же  
Стиль Пушкина. М., 1941.
- Владимиров Л. А.  
Сказки в деловой письменности 17 в. РР, 1982-4.
- Власова З. И.  
Даль. — Русская литература и фольклор. Первая половина 19 в. Л., 1976.  
Волшебный фонарь, или Зрелище С. Петербургских расхожих продавцов, мастеров и их наряде и представленных разговаривающими друг с другом, соответственно каждому лицу и званию. СПб., 1817-18. (Факсимильное издание с приложением) М., 1988.
- Воронина Т. А.  
Русский лубок 20х — 60х годов 19 в. Производство, бытование, практика. Автореферат диссертации кандидата исторических наук. М., 1990.
- Ее же  
Русский лубок 20х — 60х годов 19 в. Производство, бытование, практика. М., 1993.
- Восприятие науки в русском космизме. М., 1992.
- Восточно-славянский фольклор. Словарь научной и народной терминологии. Минск 1993.
- Временный устав РРО. СПб., 1845.
- Вяземский П. А.  
Разговор между Издателем и Классиком ... — Сочинения. Т. 2. М., 1982.
- Гаврилова Е. И.  
Русский рисунок 18 в. Л., 1983.
- Ее же  
Графика — Очерки русской культуры 18 века. Ч. 4. М., 1990.

- Гиллельсон М. И.  
П. А. Вяземский. Жизнь и творчество. Л., 1969.
- Гоголь Н. В.  
Собрание сочинений в семи томах. Т 3, Т 5. М., 1977, 1978.
- Голяшев И. А.  
Собрание сочинений. Т. 1. СПб., 1899.
- Горшков Ю. А.  
Русский лубок: от мануфактуры к фабрике. Книга. Т. 47. М., 1983.
- Гриц Т., Тренин В., Никитин М.  
Словесность и коммерция. М., 1929.
- Громыко М. М.  
Мир русской деревни. М., 1991.
- Ее же  
О народном благочестии у русских 19 в. -- Православие и русская народная культура. Кн. 1, М., 1993.
- Громыко М. М., Кузнецов С. В., Буланов А. В.  
Православие в русской народной культуре. ЭО, 1993 - 6.
- Даль В. И.  
Полтора слова о нынешнем русском языке. -- ПСС Даля. Т. 10.  
200 анекдотов, собранных в Саратове. Саратов, 1992.
- Джарылгасинова Р. Ш.  
Теория этнического самосознания в современной этнографической науке.  
СЭ, 1987 - 4.
- Географическое общество за 125 лет. Л., 1970.
- Динерштейн Е. А.  
И. Д. Сьтин. М., 1983.
- Достоевский Ф. М.  
ПСС в тридцати томах. Т. 18. Л., 1978.
- Елеонский С. Ф.  
Литература и народное творчество. М., 1956.
- Забелин И. Е.  
Домашний быт русских царей в 16 и 17 столетиях. М., 1915.
- Ивашина Е. С.  
О специфике жанра < путешествия > в русской литературе первой трети 19 в  
Вестник Московского Университета, серия филология, 1979 - 3.
- Иткина Е. И.  
Русская серия гравюра А. Дальштейна 1750-х годов. ПК 1981. Л., 1983.
- Ее же  
Русский рисованный лубок. Автореферат диссертации кандидата искусствоведения М., 1985.
- Ее же /сост./  
Русский рисованный лубок конца 18- начала 20 века. М., 1992.
- Камедина Л. В.  
Матвей Комаров и массовая литература 18 века. Автореферат диссертации кандидата литературоведения. Л., 1984.
- Канкава М. В.  
В. И. Даль как лексикограф. Тбилиси, 1958.
- Квятковская Н. К. /сост./  
Остафьево. М., 1990.
- Клепиков С. А.  
Лермонтов и его произведения в русской народной картинке. Литературное наследство. Т 45 - 46. 1948.
- Его же  
Некрасов и его произведения в русской народной картинке. Литературное наследство. Т. 53 - 54. 1949.
- Его же  
И. А. Крылов и его произведения в русской народной картинке. М., 1950.
- Его же /сост./  
Лубок. часть 1. Русская песня. М., 1939.

- Книга в России. 1861 - 1881. Т. 1, Т. 2, М., 1988 - 90.
- Ковтун В.  
Письмо В. В. Кандинского к Н. И. Кульбину. ПК, 1980. Л., 1981.
- Кожин Н. А., Абрамов И. С.  
Народный лубок второй половины 19 века и современность. Л., 1929.
- Козлов В. П.  
Колумбы российских древностей. М., 1981.
- Колесов В. В.  
Мир человека в слове Древней Руси. Л., 1986.
- Коллинз С.  
Нынешнее состояние России. (Лондон, 1671) ЧОИДР, Кн., 1, 1846.
- Комерова Г. Н.  
Сцены русской народной жизни конца 18- начала 19 веков. Л., 1961.
- Копанева Н. П.  
Песенники для народа в 19 в. -- Русские библиотеки и читатель. Л., 1983.
- Копылов А. Н.  
Русская культура 18 века в советской историографии начала 80- х годов. -- Вопросы истории русской культуры в отечественной и зарубежной историографии М., 1986.
- Корнилова А. В.  
Мир альбомного рисунка. Русская альбомная графика конца 18- первой половины 19 веков. Л., 1990.
- Коростин А. Ф.  
Русская литография 19 века. М., 1953.
- Котляревский А. А.  
Взгляд на старинную русскую жизнь по народным лубочным изображениям. 1856 -- Сочинения. Т. 1. СПб., 1889.
- Кочеткова Н. Д.  
Ораторская проза декабристов и традиции русской литературы 18 века. -- Литературное наследие декабристов. Л., 1975.
- Ее же  
Радищев и проблема красноречия в теории 18 века. 18 век, 12, Л., 1977.
- Ее же  
< Исповедь > в русской литературе конца 18 в. -- На путях к романтизму. Л., 1984.
- Краеведы Москвы. Вып. 1. М., 1991.
- Краснобаев Б. И.  
Русская культура второй половины 17- начала 19 в. М., 1983.
- Его же  
Очерки истории русской культуры 18 века. М., 1987.
- Крупчанов Л. М.  
Культурно- историческая школа в русском литературоведении. М., 1983.
- Кузьмина В. Д.  
Рукописная книга и лубок во второй половине 18 века. -- История русской литературы. Т. 4, ч. 2. М.- Л., 1947.
- Ее же  
Рыцарский роман на Руси. М., 1964.
- Кулакова Л. И.  
А. Н. Радищев < Путешествие... >. Комментарий. Л., 1974.
- Курганов Е. / сост. /  
Русский литературный анекдот конца 18 -начала 19 века. М., 1990.
- Курмачева М. Д.  
Крепостная интеллигенция России. М., 1983.
- Лашук Л. П.  
Проблема становления русской этнографической науки. -- Историография этнографического изучения народов СССР и зарубежных стран. М., 1989.
- Лемке М. К.  
Очерки по истории русской цензуры и журналистики 19 столетия. СПб., 1904.

- Ленин В. И.  
О национальной гордости великороссов. (1914) -- ПСС. Т. 26.
- Ливанова Т.  
Русская музыкальная культура 18 века. Т. 1-2., М., 1952.  
Литературная сказка пушкинского времени. М., 1988.
- Лихачев Д. С.  
Записки о русском. М., 1984.
- Его же  
Русская культура в современном мире. НМ, 1991 - 1.
- Лихоткин Г. А.  
Об авторстве < Открывка путешествия в ... И ... Т >. РЛ, 1988-1.
- Лосский Н. О.  
Характер русского народа. Кн. 1-2. М., 1990.
- Лотман Ю. М.  
Проблема народности и пути развития литературы преддекабристского периода.  
-- О русском реализме 19 века и вопросах народности литературы. М.-Л., 1960.
- Его же  
Художественная природа русских народных картинок.
- Его же  
Поэтика бытового поведения в русской культуре 18 века. УЗТГУ, Вып. 411, 1977.
- Его же  
Из комментариев к < Путешествию ... > 18 век, 12. Л., 1977.
- Его же  
Культура и взрыв. М., 1992.
- Лотман Ю. М. Успенский Б. А.  
Споры о языке в начале 19 в. как факт русской культуры. УЗТГУ, Вып. 358, 1975.
- Лупанова И. П.  
Русская народная сказка в творчестве писателей первой половины 19 в. Петрозаводск, 1959.
- Майков Л. Н.  
Пушкин. Библиографические материалы. СПб., 1899.
- Макогоненко Г. П.  
Радищев и его время. М., 1956.
- Его же  
От Фонвизина до Пушкина. М., 1969.
- Его же  
Радищев. -- Русская литература и фольклор. Л., 1970.
- Его же  
Творчество А. С. Пушкина в 1830-е годы. Л., 1982.
- Мальцева И. М.  
Локализмы в словаре Академии Российской. -- Словарь и словарное дело в России 18 в. Л., 1980.
- Ее же  
Записки путешествий 18 века как источник литературного языка и художественной литературы. -- Язык русских писателей 18 века. Л., 1981.
- Мейерберг А.  
Альбом Мейерберга. Виды и бытовые картины России 17 в. СПб., 1903.
- Мельников П. И.  
Владимир Иванович Даль. ПСС Даля. Т. 1, СПб. - М., 1897.
- Миц С. С.  
Социальная психология российского дворянства последней трети 18 - первой трети 19 в. в освящении источников мемуального характера. М., 1981.
- Мордовченко Н. И.  
Белинский и русская литература его времени. М.-Л., 1950.

- Его же  
Русская критика первой четверти 19 века . М . - Л . , 1959.
- Муравьев В . Б .  
Дорогами российских провинций. Путешествия П -С . Палласа . М . , 1977.
- Народная гравюра и фольклор в России 17 -18 вв . М . , 1976.
- Некрасов Н . А .  
Кому на Руси жить хорошо .-- Сочинения в трех томах . М . , 1959.
- Непомнящий В .  
К творческой эволюции Пушкина в 30-е годы . ВЛ , 1973-11.
- Никитина С . Е .  
Устная народная культура и языковое сознание . М . , 1993.
- Новиков В . И .  
Остафьево : Литературные судьбы 19 века . М . , 1991.
- ОИРАЭ , Вып . 7 Л . , 1977.
- Окрокверцхова И . А .  
Путешествия Палласа по России . Саратов , 1962.
- Орлов П . А .  
Русский сентиментализм . М . , 1977.
- Островский Г . С .  
О природе русского изобразительного фольклора . СЭ , 1974-1.
- Его же  
Русская вывеска . Панорама искусств . 78 . М . , 1979.
- Его же  
Лубок в системе русской художественной культуры 17 -20 вв . Советское искусствоведение . 1981-2.
- Его же  
Народная художественная культура русского города 18-начала 20 в . как проблема истории искусства . -- Примитив и ... М . , 1983.
- Очерки московской жизни . М . , 1962.
- Памятники литературы древней Руси 12 в . М . , 1980.
- Памятники московской деловой письменности 18 века . М . , 1981.
- Панченко А . М .  
Русская культура в канун петровских реформ . Л . , 1984.
- Пекарский П . П .  
Русские мемуары 18 века . Современник , 1855-4.
- Пиксанов Н . К .  
< Бедная Анюта > Радищева и < Бедная Лиза > Карамзина . 18 век . , 3 , М . , 1958.
- Пименов В . В . , Эпштейн Е . М .  
Русские исследователи Карелии ( XVIII в ). Петрозаводск , 1958.
- Плотников В . И .  
Фольклор и русское изобразительное искусство второй половины 19 века . Л . , 1987.
- Полвека для книги . Литературно - художественный сборник , посвященный пяти - десятилетию издательской деятельности И . Д . Сытина . М . , 1916.
- Померанцева Э . В .  
Судьбы русской сказки . М . , 1965.
- Порудоминский В . И .  
< А рассказать тебе сказку ? > . М . , 1970.
- Его же  
Даль . М . , 1971.
- Его же  
Жизнь и слово : Даль . М . , 17985.
- Поспелов Г . Г .  
Бубновый Валет . Примитив и городской фольклор в московской живописи 1910- х годов . М . , 1990
- Примитив и его место в художественной культуре Нового и Новейшего времени . М . , 1983.

- Пишкарёв Л. Н.  
Сказка о Еруслане Лазаревиче . М ., 1980.
- Пушкин А. С.  
ПСС, Т .8, 11, 12. М .- Л., 1948-49.
- Пушкин. Письма последних лет .1834-37. М ., 1969.
- Пушкин в воспоминаниях современников. Т.2, М., 1974.
- Пыпин А. Н.  
История русской этнографии . Т.1-4. СПб ., 1890-92.
- Радищев А. Н.  
Путешествие из Петербурга в Москву . Т.2, Материалы к изучению  
< Путешествия ... > М .- Л., 1935.
- Его же  
ПСС, Т.1-3, М .- Л., 1938 - 1952.
- Его же  
Путешествие из Петербурга в Москву . Вольность СПб., 1992.
- Ровинский Д. А.  
Русские народные картинки. Т.1-5. СПб ., 1881.
- Его же  
русские народные картинки. атлас. т.1-4. спб., 1881-91.
- Его же  
Русские народные картинки. ( Под наблюдению Н. Собко .) т.1-2. СПб ., 1900.
- Рогинская Ф. С.  
Советский лубок. М., 1929.
- Рудакова Н.  
Литографская мастерская И. А. Гольшева во Мстере -- Народная гравюра  
и фольклор в России. М., 1976.
- Рукавицын М. М.  
Принадлежит народу . М., 1990.
- Русская литературная сказка . М., 1989.
- Русские сказки в ранних записях и публикациях ( 16 - 18 века ). Л., 1971.
- Сакович А. Г.  
Русский лубок на дереве 17 -18 вв. ДИ , 1971-10.
- Ее же  
Русский лубок на меди. ДИ , 1972-9.
- Ее же  
Народная гравированная книга Василия Кореня. М ., 1983.
- Сакулин П.  
Русская литература и социализм . М ., 1922.
- Сатирические журналы Н. И. Новикова . М - Л ., 1951.
- Семенников В. П.  
Радищев. Очерки и исследования. М. - Пг., 1923.
- Синявский А.  
Мысли врасплох . Paris, 1965.
- Сиповский В. В.  
Очерки из истории русского романа. Т.1, Вып.1-2, СПб ., 1909-10.
- Скафтымов А.  
О стиле < Путешествия ... > А. Н. радищева -- Статьи о русской литературе  
Саратов, 1958.
- Слонимский А.  
Мастерство Пушкина . М., 1959.
- Снегилев И. М.  
Русская народная галерея, или лубочные картинки . Отечественные записки .  
1822. Ч.12. №30.
- Его же  
Лубочные картинки русского народа в московском мире. М., 1861.

- Соболевский А .  
Рец. на : А. Н. Пыпин. История русской этнографии . ЖМНП . , 1892,  
февраль.
- Собрание русских народных песен с их голосами , положенных на музыку Ивана  
Прачем. СПб. , 1806.
- Соколов Ю . М.  
Жизнь и научная деятельность А . Н. Афанасьева. -- Народные русские  
сказки А . Н. Афанасьева. в 3 томах . Т.1, Л. , 1936.
- Солженицын А. И .  
СС в шести томах . Т.4. 1970.
- Соловей Т . Д.  
А . Н. Пыпин и его место в русской историографии. 30 , 1994-4.
- Старцев А . И.  
Радищев : Годы испытаний . М . , 1990.
- Стасов В . В .  
Разбор сочинения Д . А. Ровинского. -- СС в трех томах, СПб . , 1894.
- Степанов Н . Н .  
Русское географическое общество и этнография . СЭ, 1946-4.
- Стихотворная сказка ( Новелла ) 18- начала 19 века. Л . , 1969.
- Сытин И . Д.  
Жизни для книги. Страницы пережитого. Изд 2-ое дополнение . М. , 1985.
- Тартаковский А . Г .  
Русская мемуаристика 18- первой половины 19 в. М. , 1991.
- Токарев С . А.  
История русской этнографии . М . , 1966.
- Топурия Н .  
Страницы народной < газеты >. ЛУ , 1990-4.
- Трубицын Н.  
О народной поэзии в общественном и литературном обиходе первой трети 19  
века . СПб. , 1912.
- Тургенев И . С .  
ПСС в тридцати томах . Т.10, М. , 1982.
- Тынянов Ю . Н.  
О литературном факте . Лф. 1924-2.
- Тючев Ф . И.  
Полное собрание стихотворений. л. , 1957.
- Успенский Б .  
Из истории русского литературного языка 18 начала 19 века. М . , 1985.
- Ушедшая Москва. М. , 1963.
- Филиппов В . Р .  
Из истории изучения русского национального самосознания. СЭ, 1991, No,1.  
Фольклор русского Устья . Л. , 1986.
- Харламов И.  
Русский народный юмор. Дело . 1881-12.
- Хромов О . Р .  
Историография русской лубочной картинки 19 столетия . Автореферат  
диссертации кандидата исторических наук. М . , 1991.
- Цивьян Т . В .  
Лингвистические основы балканской модели мира. М . , 1990.
- Челищев П . И.  
Путешествие по Северу России в 1791 году. СПб . , 1886.
- Чистов К . В .  
Путешественник по Северу России П. И. Челищев. На рубеже , 1952-9.
- Чистяков В.  
Из котомки офени . Старинные песенники Альманах библиофила . 14 . М. , 1983.
- Чулков М . Д .  
Собрание разных песен. Ч.1-3, СПб. , 1770-73. ( 1913 )

- Шкловский В . Б.  
Матвей Комаров . Житель города Москвы . М . , 1929.  
Его же  
Пушкин . - Избранное в двух томах . Т . 1, М , 1983.  
Штранге М . М.  
Демократическая интеллигенция России в 18 веке . М . , 1965.  
Эйхенбаум Б . М.  
Лермонтов ( 1924 ) -- О литературе. М . , 1987.  
Его же  
Литература и литературный быт. -- Мой современник . Л . , 1929.

ВЛ	Вопросы литературы
ДИ	Декоративное искусство
ЖМНПР	Журнал Министерства народного просвещения
ЛУ	Литературная учеба
НМ	Новый мир
ОИРАЭФ	Очерки истории русской антропологии , этнографии и фольклористики
РЛ	Русская литература
РР	Русская речь
СЭ	Советская этнография
УЗТГУ	Ученые записки Тартуского Государственного Университета
ЭО	Этнографическое обозрение

- Andrew J.  
Racial sentimentalism on sentimental radicalism? -- Discontinuous discourses in modern Russian literature. N.Y., 1989.
- Atkinson J. A.  
A picturesque representation of the manners, customs and amusements of the Russians. Vol. 1-3. London, 1812.
- Brooks J.  
When Russia learned to read. Literacy and popular literature 1861-1917. Princeton, 1985.
- Burke P.  
Popular culture in early modern Europe. London, 1978.
- Carter S. K.  
Russian nationalism. Yesterday, today, tomorrow. London, 1990.
- Cherniavsky M.  
Tsar and people. Studies in Russian myths. New Haven and London, 1961.
- Claudon-Adnemar C.  
Imagerie populaire Russe. Milan, 1977.
- Claudon-Adnemar C.  
Image et société en Russie 1668-1725. Berne, 1985.
- Farrell D. E.  
Medieval popular humor in Russian eighteenth century Lubki. Slavic review. Vol. 1 52-4.
- Farrell D. E.  
Shamanic elements in early eighteenth century Russian woodcuts. Slavic review. Vol. 52-4.
- Frierson C. A.  
Peasant icons: Representation of rural people in late 19th century Russia. Princeton, 1993.
- Gasparov V.  
Introduction. - The semiotics of Russian cultural history. Cornell UP., 1985.
- Heller M.  
Le machine et les rouges. Paris, 1985.
- Jakobson R.  
On Russian fairy tales. Selected writings, 4. Hague-Paris, 1966.
- Lewin M.  
The Soviet system. Essays in the social history of interwar Russia. N.Y., 1985.
- Lewin M.  
The Gorbachev phenomenon. A historical interpretation. Berkeley and Los Angeles, 1988.
- Luvok. Russian folk pictures 17th to 19th century. Leningrad, 1984.
- Marker G.  
Publishing, printing, and the original of intellectual life in Russia 1700-1800. Princeton, 1985.
- Rice J. I.  
The memoirs of A. T. Bolotov and Russian literary history. -- Russian literature in the age of Catherine the Great. Oxford, 1976.
- Rogger H.  
National consciousness in eighteenth-century Russia. London, 1960.
- Russell B.  
The practice and theory of Bolshevism. London, 1920.

- Seton-Watson M.  
Scenes from Soviet life: Soviet life through official literature. London,  
1986.
- Sinyavsky A.  
Soviet civilization : A cultural history. N.Y., 1988.
- Slonim M.  
The epic of Russian literature.
- Stavrou T. G., Weisensel P, R.  
Russian travelers to the christian East from the twelfth to the twentieth  
century. Ohio, 1986.
- Todd III W. M.  
Fiction and society in the age of Pushkin. Cambridge, 1986.